

日本人高校生の海外修学旅行と異文化意識変化

大畑 京子

1. はじめに

日本の高等学校における海外修学旅行の実施件数と参加人員数は、過去 20 年ほどの間に飛躍的な増加を見せている¹。文部科学省の調査によれば、平成 4(1992)年度には、全国で海外修学旅行を実施した高等学校が 349 校、参加した高校生の数は 79,332 人であったものが、平成 12(2000)年度には実施校数 1,232 校、参加生徒 196,971 人と、10 年弱の間に参加校数で約 3.5 倍、参加人数でも 2.5 倍に増えている。2001 年度以降は同時多発テロの影響などで一時減少したが、平成 18(2006)年以降は再度増加に転じ、平成 20(2008)年度には、実施校数 1,357 校、参加人員 179,573 人とテロ以前の水準にもどっている²。1,357 校という実施校は、平成 20 年度の全国の高等学校数 5,243 校中 25.9%に当たり、1/4 強の高校が海外修学旅行を実施したことになる³。

しかしながら、こうした海外修学旅行増加の状況の中で、その成果や意義についての学術的な研究はまだ行われていないのが実情である。

本研究は、海外修学旅行において、日本人高校生が平素とは全く異なる生活環境に身を置き、異文化を実体験することの意義に焦点を当て、海外修学旅行を通して、高校生たちの異文化に対する興味・関心が喚起され、異文化理解への意欲が高まるのか、また、海外修学旅行は異文化理解を促進する教育活動として有効であるのかを検証することを目的とする。

2. 異文化理解学習への「動機づけ」

2.1 異文化に対する興味・関心をどう測るか

学習活動における「動機づけ」の重要性は多くの研究者によって指摘されている。廣森(2003)⁴は「動機づけ」を「目標に向かった行動を喚起し、それを支援するプロセス」と定義づけており、本稿でもその定義に倣い、ある目標に向かって行動を起こさせ、その行動を持続させるよう働きかける過程・機能であると考え、「動機づけ」を高める要因は何か、いかにして学習者の「動機づけ」を高めるかについて、これまで教育者や研究者によってさまざまな側面から研究が行われてきている。

本研究では、異文化について学ぶことをひとつの学習活動と考え、異文化に対する意識を測る方法として、異文化理解学習への取り組みを促すもの、すなわち「動機づけ」を取り上げ、海外修学旅行という体験が「動機づけ」にどのような変化をもたらすかを、質問紙調査を通して分析する。

異文化について学ぶことは、外国語学習などに比べ幅が広く、学ぶ目的や学びたい内容、学ぶ手段に関して個人差が大きいと考えられる。単に本を読むなどして対象文化についての知識を得るのか、実際にその文化を持つ国や地域を訪れ、実体験を通して風俗や習慣を学ぶのか、対象文化を背景に持つ友人を持つなどして、異なる価値観や考え方に対する理解を深めるのかなど、個人により、異文化理解にあたっての手段やそれに伴って生じるイメージはさまざまである。場合によっては、そこで話されている言語や、その国や地域の地理や歴史を学ぶことにまで踏み込んでいくこともあるかも知れない。本研究では、広範囲にわたって「異文化に関わることを学ぶ」という行動を促すものを、異文化理解学習への「動機づけ」と考え、各質問項目の文言から被験者が受けるイメージを限定するような注釈はつけず、各人の思い描く「異文化理解」に関して回答してもらうこととした。

2.2 自己決定理論における動機づけの枠組み

学習に対する動機づけに関して、外発的・内発的という区分が用いられることは多い。しかしながら、現実には教室で学ぶ高校生を見ると、異文化理解学習のみならず、どのような学習に対しても、「おもしろいから」

「入試に必要なだから」「先生や友人に認めてもらいたいから」など、極めて多様な学習動機を併せ持っていることが見て取れる。また、主要な動機が入れ替わったり、「動機づけ」の強さが変化したりすることも頻繁に観察できる。したがって、一義的に「この生徒は内発的に動機づけられている」「この生徒の動機は外発的なものだ」などと判断することは不可能であり、生徒の動機づけのありのままの姿を正確に反映しているとも言えない。また、外発的か内発的かという二項対立軸においては「外発的」と分類される動機でも、「ペナルティーがあるから」「親や先生にほめられたいから」という賞罰的なものから「将来のためになるから」「自分の成長に役立つから」という自己の将来を見据えたものまで極めて幅が広い。したがって、内発的な動機づけは望ましいものであり外発的な動機づけは望ましくないとの単純な図式は、現実にはそぐわないものであり、特に、外発的動機づけをより詳細に分析していく必要があると考える。そこで、本研究では、Deci and Ryan(1985)⁵によって提唱された「自己決定理論」(Self-Determination Theory)に着目した。

Deci and Ryan(1985)は、外発的動機づけは「自己決定性」や「自律性」の度合いによりさらに分類することができるとして、「自己決定理論」を展開した。この理論によれば、動機づけの種類は「自己決定性」の強さにより分類され、それらは一直線上に並び連続体を成すものとして捉えられている。図1はRyan & Deci(2002)による図式化である⁶。

図1. 動機・調整の種類と自己決定性

動機づけの種類	無動機	外発的動機づけ			内発的動機づけ	
調整の種類	非調整	外的調整	取り入れ 的調整	同一視的 調整	統合的 調整	内発的調整
行動の質	自己決定性低				自己決定性高	

彼らの示した分類を順に見ていくと、まず、行動への意欲が欠如した状態が「無動機」(amotivation)であり、この状態では、人は全く行動しないか、行動への意欲はなく行動しているふりをするかのいずれかであるとされる。次に、外発的動機づけの中でも最も自律性が低いものが「外

4 大畑 京子

的調整」(external regulation)であり、報酬を得ることや罰を受けないために行動を起こすという場合がこれに当たる。次が「取り入れの調整」(introjected regulation)であり、一応内面化が始まっているが、まだ真に自分自身のもので受け入れられてはいない状態であるとされる。次の「同一視的調整」(identified regulation)の段階では、より自己決定性が高くなり、行動の目的や調整の価値が意識され、その行動を個人的に重要なものとして受け入れているとされる。「統合的調整」(integrated regulation)は、外発的動機づけの中で最も自律性が高く、すでに自分のものである価値観や目標、要求と行動が一致してきている段階である。しかしながら、興味や楽しさからというよりもむしろ個人的に重要な結果を得るために行動するという点で、内発的ではなく外発的なのだと説明されている⁷。

このように外発的動機づけを細かく分類した点は、先に述べたさまざまな学習動機づけを持つ高校生の実態を考えた場合、積極的に支持できるものである。また、それぞれの種類の動機づけは「一直線上に連続体を成す」という考え方は、高校生の持つ一見多様で複雑な動機づけを、「自己決定性」という見地から明確に図式化したものとして説得力を持つ。速水(2005)⁸は、これまでは「外発的動機づけ 対 内発的動機づけ」という構図であったものが、「自己決定理論」においては、「両者を連続線上のものとしてとらえているところに斬新さが窺える」⁹と評価し、さらに、この理論の背景には「動機づけは個人が現実世界と相互作用することによって形成され、変容していくものだという前提があると考えられる」¹⁰として、動機づけの移行の可能性を示唆している。

本研究は、海外において異文化を経験するという「現実世界との相互作用」により、高校生たちの中に異文化理解への動機づけが「形成され、変容していく」可能性を調査することを目指している。したがって、「自己決定理論」による動機づけの変容という考えに基づき、連続線上にある一連の動機の枠組みを用いて、異文化理解に対する高校生たちの動機づけが異文化体験の前後でどう変わっていくのかを調査することは、本研究の趣旨に合うものであると考える。

3. 異文化に対する意識についての質問紙調査

3.1 調査目的と研究課題

この調査では、「自己決定理論」における動機づけの枠組みを用いて、日本人高校生の異文化理解に対する動機づけが、海外における異文化体験の前後でどのように変化するかを調べることで、海外修学旅行の異文化理解学習への有効性を明確にすることを目的とする。

その際、動機づけの変化へ影響を及ぼす可能性のある要因として、旅行先の国・地域と、個々の生徒のそれまでの異文化体験を想定し、研究課題として次の3点を設けることとした。

1. 海外修学旅行という体験は、高校生の異文化理解学習に対する動機づけを高めるか
2. 修学旅行先の国・地域により、異文化理解学習への動機づけの変化に違いがあるか
3. 修学旅行以前の異文化体験の有無は、異文化理解学習への動機づけの変化に影響するか

3.2 調査対象と調査方法

この調査は、平成20年10月から12月の間に海外修学旅行に参加した静岡県内7校の高校2年生を対象として、修学旅行前と旅行後の2回実施した。対象となった7校の選定は意図的なものではなく、調査への協力を承諾してくれた全8校のうちの7校である。1校については、事後調査への協力が得られず、調査対象からは除外した。

まず、旅行前2週間から前日までの間に、異文化に対する意識についての事前調査を行い、その際、異文化体験に関する調査も同時に行った。質問紙への回答は、ホームルーム等の時間に教員の立会いの下に行われた。次に、旅行後2週間から2ヶ月の間に、事前調査と同じ内容で事後調査を実施した。調査はいずれも無記名で行われた。

調査の対象となった7校についての情報と、各校の修学旅行の参加人数、旅行先については、表1に示す通りである。E校の旅行先は、クラス単位でイギリス、フランス、イタリアを選択する形がとられており、平成20年度は3クラスがフランス、2クラスがイタリアを選択し、イギリスを選択したクラスはなかった。活動内容は、観光や体験学習に加え、

D校とF校は語学研修を、A校とB校、G校は現地の学校との学校間交流を行っている。

表 1. 学校情報と海外修学旅行に関する情報

	設置	学科	人数	研修先
A	県立	普通科	243	中国(北京)
B	県立	情報システム科 情報ビジネス科 情報デザイン科	193	中国(杭州)
C	県立	普通科	321	中国(杭州)
D	県立	国際ビジネス科	42	アメリカ(ハワイ)
E	県立	普通科	201	フランス イタリア
F	私立	英数科	147	アメリカ(カリフォルニア)
G	県立	普通科・芸術科	239	オーストラリア

研究課題 2 のために、上記の学校を、中国に旅行したA校、B校、C校と、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアに旅行したD校、E校、F校、G校とに分けて分析することとした。修学旅行先として肯定的な捉え方をした生徒が多かったヨーロッパやアメリカ、オセアニアの国々と、比較的少なかった中国とで、結果に違いがあるかどうかを検証するためである。

3.3 異文化体験に関する調査結果

表 2 は、「異文化に対する意識についての事前調査」と同時に行った「異文化体験に関する調査」の結果である。海外修学旅行を控えた高校 2 年生 1,413 人を対象にして調査を実施し、海外修学旅行参加以前の異文化体験について回答を得た。回収されたもののうち、1,146 人の回答を分析対象とした¹⁾。

表 2. 高校生の異文化体験の有無、目的・方法、期間・頻度(N=1,146)

質問項目	人数	割合
1. 海外での異文化体験の有無		
はい	252	22.0%
いいえ	894	78.0%
1-1. 海外滞在の主な目的		
観光	155	13.5%
ホームステイ	62	5.4%
居住	14	1.2%
その他	21	1.8%
1-2. 海外滞在期間		
1 週間以内	169	14.8%
1 ヶ月以内	67	5.9%
1 年以内	2	0.2%
1 年以上	14	1.2%
2. 日本国内での異文化交流の有無(ALT の授業を除く) ¹²		
はい	329	28.7%
いいえ	817	71.3%
2-1. 交流の主な目的		
留学生などのホームステイの受入れ	27	2.3%
留学生などのクラスへの受入れ	115	10.0%
国際交流イベントなどへの参加	49	4.3%
その他	138	12.0%
2-2. 交流の期間		
1 日	111	9.7%
1 週間以内	64	5.6%
1 ヶ月以内	32	2.8%
1 ヶ月以上	122	10.7%

3. 国内外の異なる文化的背景を持つ友人との交流の有無		
はい	92	8.0%
いいえ	1,054	92.0%
3-1. 交流の方法		
手紙のやりとり	10	0.9%
メールのやりとり	45	3.9%
電話で話す	1	0.1%
会って話す	32	2.8%
メッセージャーなどで通信	2	0.2%
その他	2	0.2%
3-2. 交流の頻度		
ほぼ毎日	10	0.9%
週に数回程度	9	0.8%
月に数回程度	30	2.6%
年に数回程度	43	3.8%

この調査から、海外での異文化体験がある生徒は全体の約 2 割、日本国内での異文化体験がある生徒が約 3 割、国内外に異なる文化的背景を持つ友人がいる生徒が 1 割弱であることがわかる。しかしながら、1～3 の質問すべてに「いいえ」と答えた生徒が 647 人おり、全体の 56.5% に上った。

この結果を踏まえて、研究課題 3 のために、1)海外での異文化体験のある生徒、2)日本国内での異文化体験がある、または、国内外に異なる文化的背景を持つ友人がいる生徒、3)授業以外に異文化に接したことのない生徒、の 3 つのグループに分け、修学旅行前後での動機づけの変化に差があるかを分析することにした。具体的には、質問 1 に「はい」と答えた者は、質問 2 と 3 の回答に関係なく 1)のグループに、質問 1 に「いいえ」と答えた者のうち、質問 2 と 3 の両方あるいはいずれかに「はい」と答えた者を 2)のグループに、すべての質問に「いいえ」と答えた者を 3)のグループに振り分けた。各グループの人数は、1)252 人、2)247 人、3)647 人である。

3.4 質問票

質問の作成にあたっては、先に概観した「自己決定理論」の動機づけの枠組みを用いた。先行研究を参考にして、まず12項目の質問を用意した¹³⁾。その際、「統合的調整」は「同一視的調整」との区別がつきにくいという先行研究の判断に倣い質問票に含めなかった。その後、予備調査の段階で内容がわかりにくいとの指摘があった質問1つを除外したため、調査は11項目について行われた。事前調査と事後調査で同じ質問票が用いられたが、質問項目はランダムに並べかえられ、事前と事後で順番は入れ替えた。

動機の種類と質問項目は表3に示す通りである。

表3. 異文化に対する意識についての質問項目

動機の種類	質問項目
無動機	1. 日本で生活しているので、異文化については知らなくてよい 2. 異文化について学ぶことは時間の無駄だという感覚がある
外的調整	3. 異文化についての知識があれば、よい仕事が得られると思う
取り入れ的調整	4. 異文化についての知識があれば、自分自身が博識であると思えるのではないか 5. 異文化についての話題についていけないと気まずいので知識があったほうがよいと思う 6. 異文化についての知識があれば、友だちに博識な人間であると思わせることができるのではないか
同一視的調整	7. 異文化について学ぶことで、自分の視野を広げることができると思う 8. 異文化について学ぶことで、異なる文化的背景を持つ人々に対して寛容になれると思う
内発的動機	9. 自分たちのものとは異なる文化について知ることは、興味深い 10. 異文化について学ぶことは、楽しいと思える 11. 異文化について新たな知識を得られることは、喜ばしい

回答方法には、「まったく当てはまらない」=1、「あまり当てはまらない

い」=2、「どちらともいえない」=3、「やや当てはまる」=4、「非常に当てはまる」=5の5件法を採用した。

4. 分析方法と結果

4.1 分析方法

5つの動機の種類について、種類ごとに事前調査と事後調査における平均値を求め、その変化を比較することとした。分析に当たっては、まず、事前調査、事後調査の両方に回答し、記入漏れのないものを対象とした上で、すべての質問に1=「まったく当てはまらない」または5=「とても当てはまる」と回答したのものについては、質問の内容を考慮すると信頼性が低いと判断し、分析対象から除くこととした。その結果、1,146人の回答が分析の対象となった。

分析に際して、信頼性係数の算出には SPSS 17.0 を、それ以外は Statcel 2nd version を使用した。

正規性の検定の結果、データの分布は正規分布とはみなせなかったことから、ノンパラメトリック検定を実施することとした。

また、クロンバック α による信頼性係数は、質問が1項目のみとなってしまう外的調整を除き、表4に示すとおりである。内発的動機では、事前調査・事後調査とも.80を上回り、内的一貫性は確認できた。項目数が少なかったため、無動機、取り入れ的調整、同一視的調整では.62～.72の間の数字であったが、先行研究でも、項目数の少ない場合.60を確認の基準としており、内的一貫性は確かめられたと考える¹⁴。

4.2 旅行先別分析の結果

はじめに、3.2で示したとおり、分析対象となった7校を、中国へ旅行した3校と、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリアへ旅行した4校に分けて分析を行った。表4.はその基本統計量をまとめたものである。また、図2は中国旅行の事前調査と事後調査の平均値の変化を、図3はヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行の場合の平均値の変化を示したものである。

表 4. 事前調査・事後調査における各動機の基本統計量

	無動機		外的		取り入れ		同一視		内発的	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
<u>中国旅行</u>										
平均	2.22	2.16	3.49	3.29	2.98	2.79	3.88	3.79	3.61	3.78
標準偏差	0.92	0.95	0.96	1.01	1.05	0.98	0.91	0.92	1.00	0.95
歪度	0.54	0.67	-0.32	-0.29	0.13	-0.13	-0.74	-0.77	-0.58	-0.75
尖度	-0.02	0.12	-0.17	-0.19	-0.47	-0.46	0.48	0.60	0.04	0.42
中央値	2	2	4	3	3	3	4	4	4	4
<u>欧米豪旅行</u>										
平均	2.05	1.92	3.56	3.44	3.04	2.78	3.93	3.99	3.87	4.14
標準偏差	0.96	0.91	1.00	1.01	1.06	1.06	0.91	0.92	0.96	0.97
歪度	0.92	0.97	-0.43	-0.44	-0.15	0.06	-0.90	-0.82	-0.82	-1.05
尖度	0.69	0.81	-0.09	-0.07	-0.49	-0.49	0.95	0.61	0.49	1.24
中央値	2	2	4	3	3	3	4	4	4	4
クロンバック α	.623	.673	—	—	.717	.710	.616	.676	.837	.885

事前調査においては、どちらの研修とも、無動機の平均値が最も低く、取り入乐的調整、外的調整の順に値が大きくなる。最も高い値を示したのはいずれも同一視的調整で、内発的動機の値を上回っている。しかし、事後調査の結果では、中国旅行では同一視的調整と内発的動機の平均値にほとんど差はなく、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行では内発的動機の値が同一視的調整の値を上回った。また、中国旅行では事後調査の平均値が事前調査の値を上回ったのは内発的動機のみであったが、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行では、同一視的調整と内発的動機の2種類で事後調査の値が事前調査の値を上回った。

図 2. 事前調査と事後調査の平均値の変化(中国旅行)

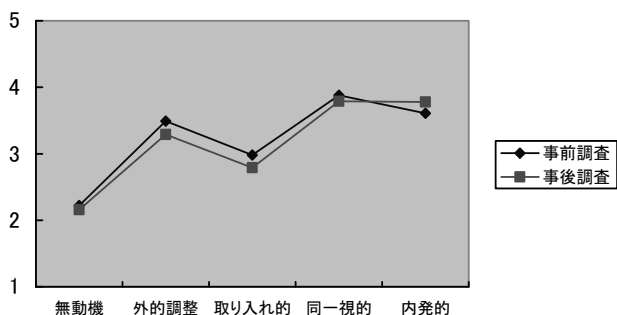
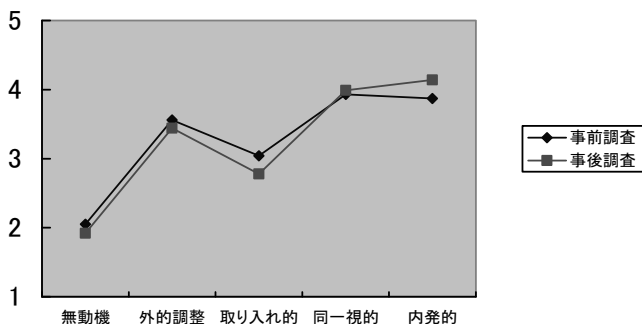


図 3. 事前調査と事後調査の平均値の変化(英米豪旅行)



続いて、ウィルコクソン符号付順位和検定により、事前調査と事後調査の値に有意な差があるかを検定した。表 5 はその結果と相関係数(r)をまとめたものである。中国旅行では、5つの動機の種類すべてにおいて、また、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行では、同一視的調整を除く4つの動機の種類において統計的に有意な差があることが確認できた。つまり、中国旅行においては、無動機、外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整の各動機において値は有意に下がり、内発的動機においては有意に上がっており、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅

行においては、無動機、外的調整、取り入れの調整において値は有意に下がり、内発的動機において有意に上がっていることが確認された。

表 5. ウィルコクソン符号付順位と検定による事前調査と事後調査の比較

動機の種類	中国旅行			欧米豪旅行		
	Z	p	r	Z	p	r
無動機	-2.29	0.02*	.39	-4.19	0.00*	.41
外的調整	-4.45	0.00*	.38	-2.55	0.01*	.32
取り入れの調整	-7.18	0.00*	.37	-8.03	0.00*	.36
同一視的調整	-3.30	0.00*	.46	-1.76	0.08	.44
内発的動機	-8.03	0.00*	.52	-11.12	0.00*	.47

* $p < 0.05$

4.3 異文化体験の有無による分析の結果

次に、3.3 で示した通り、修学旅行前の異文化体験の有無により、生徒を3グループに分けて分析を実施した。グループ1は修学旅行以前に海外での異文化体験のあった生徒、グループ2は海外での異文化体験はないものの、国内で異文化に接した経験がある、もしくは、異なる文化的背景を持つ友人がいる生徒、グループ3は授業以外に異文化に触れる機会を持ったことのない生徒のグループである。表6はその基本統計量を示したものである。

事前調査の平均値を見ると、どのグループも同一視的調整が最も高い値を示しており、内発的、外的、取り入れ的、無動機の順に値が低くなっている。次に各グループの事前と事後の平均値を比べると、無動機・外的調整・取り入れ的調整の各動機では、3グループとも事前より事後の方が平均値は下がっており、同一視的調整はグループ1では変化がないものの、グループ2と3では平均値がやや下がっている。一方、内発的動機はどのグループでも平均値が上昇している。その結果、事後調査においては、すべてのグループで内発的動機が最も高い値を示し、同一視的、外的、取り入れ的、無動機の順に低くなっている。また、グループ間で平均値を比べてみると、無動機の値は事前、事後ともグループ3が最も高く、グループ2、グループ1の順に低くなっており、逆に、同一視

的調整と内発的動機では、グループ1の値が最も高く、グループ2、グループ3の順に低くなっている。

表6. 事前調査・事後調査における各動機の基本統計量

	無動機		外的		取り入れ		同一視		内発的	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
グループ1										
平均	1.90	1.87	3.64	3.43	3.02	2.85	4.07	4.07	4.00	4.13
標準偏差	0.87	0.89	0.99	1.00	1.05	1.01	0.85	0.86	0.94	0.84
歪度	1.00	0.96	-0.48	-0.43	-0.20	-0.09	-0.88	-0.77	-0.95	-0.76
尖度	1.16	0.59	-0.03	-0.12	-0.51	-0.47	0.94	0.41	0.79	0.10
中央値	2	2	4	4	3	3	4	4	4	4
グループ2										
平均	1.98	1.95	3.66	3.39	3.11	2.80	4.05	4.00	3.85	4.09
標準偏差	0.93	0.93	0.94	1.07	1.08	1.04	0.89	0.90	1.01	0.91
歪度	0.86	0.83	-0.38	-0.28	-0.17	0.00	-0.88	-0.91	-0.80	-1.07
尖度	0.44	0.21	-0.10	-0.37	-0.42	-0.50	0.74	0.84	0.26	1.11
中央値	2	2	4	3	3	3	4	4	4	4
グループ3										
平均	2.30	2.17	3.41	3.31	2.96	2.77	3.78	3.75	3.57	3.80
標準偏差	0.94	0.95	0.97	1.00	1.04	1.01	0.92	0.94	0.97	0.95
歪度	0.57	0.73	-0.32	-0.37	-0.12	-0.03	-0.77	-0.73	-0.58	-0.82
尖度	0.08	0.36	-0.17	-0.08	-0.48	-0.45	0.59	0.54	0.14	0.60
中央値	2	2	3	3	3	3	4	4	4	4

続いて、ウィルコクソン符号付順位和検定により、事前調査と事後調査で有意な差があるかどうかを検定した。表7はその結果と相関係数(r)をまとめたものである。どのグループも、外的調整、取り入れの調整では、事後調査の値は事前調査の値より有意に下がっており、内発的動機の値は有意に上がっていることが確認された。加えて、グループ3においては無動機の値も有意に下がっていることが確かめられた。

表 7. ウィルコクソン符号付順位と検定による事前調査と事後調査の比較

動機の種類	グループ 1			グループ 2			グループ 3		
	Z	p	r	Z	p	r	Z	p	r
無動機	-0.78	0.43	.36	-0.76	0.44	.46	-4.85	0.00*	.37
外的調整	-3.24	0.00*	.42	-3.60	0.00*	.39	-2.42	0.02*	.31
取り入れ的調整	-4.21	0.00*	.34	-7.16	0.00*	.39	-7.24	0.00*	.35
同一視的調整	-0.08	0.93	.46	-1.20	0.23	.47	-0.87	0.38	.42
内発的動機	-3.98	0.00*	.45	-7.42	0.00*	.56	-10.7	0.00*	.48

* $p < 0.05$

5. 考察

5.1 研究課題別考察

今回の質問紙調査の分析結果から、異文化を学ぶことに対して動機づけられていない生徒は減少し、一方、内発的な動機を持つ生徒が増加したことが認められた。このことから、海外修学旅行を通して異文化を実体験することで、日本人高校生の異文化に対する興味・関心は高まったと考えられる。したがって、海外修学旅行は、異文化への関心を高めるという側面において有効であることが確認できたと考えよう。

旅行先別の分析では、中国旅行とヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行のいずれにおいても、無動機、外的調整、取り入れ的調整の値は有意に下がり、また、内発的動機の値は有意に上昇していることが認められ、異文化に対する興味・関心を喚起したと言える。しかしながら、同一視的調整の値は、ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア旅行においては大きな変化がみられなかった一方、中国旅行では有意に下がっている。同一視的調整については、どちらの群も事前調査での数値が高かったとはいえ、実際の異文化体験の後で有意に値が下がったことは予想外であり注目に値する。その理由については 5.2 で考察する。

また、異文化体験の有無による分析の結果、これまで異文化に接する機会がなかった生徒のグループで無動機の値が有意に下がり、海外修学旅行を体験することで、異文化に対する関心を持つようになったことが確認された。このことから、海外修学旅行は、これまで異文化にあまり積極的に関わってこなかった生徒たちの関心を喚起する機会となり得る

ことが証明されたと言える。同時に、修学旅行前に異文化に触れる経験のあった生徒のグループでも内発的動機の値は有意に上昇しており、これまでの異文化体験の有無に関わらず、海外修学旅行という経験は、生徒たちの異文化に対する関心を一層高めるものであると結論づけることができよう。

5.2 同一視的調整の値低下について

2.2で概観した通り、同一視的調整は外発的動機づけの中では統合的調整に次いで自己決定性が高く、行動の重要性を認識し、自らの価値と選択によって行動する段階である。異文化理解学習においては、異文化をより深く知ることによって「視野が広くなり考え方の幅が広がる」、「複数の文化を相対的に見られるようになる」、「異なる価値観や行動様式を尊重できるようになる」などの望ましい自己イメージに近づくために学ぶということになる。

しかし中国旅行において、旅行後にこの動機づけの値が低下してしまったのはどのような理由からであろうか。速水(1995)¹⁵は、外発か内発かを考える場合の補助的次元として現在志向か未来志向かという区分を提案しており、同一視的調整は最も未来志向が強い動機づけであるとしている。学習活動に障害・過度の緊張・著しい不快感が伴う場合、望ましい自己像を実現したいという欲求と、学習活動の継続の困難さとの間で葛藤が生じ、その結果、自らの望む自己イメージへ近づきたいという気持ち弱まり、学習を継続する意欲が減退することとなる。このような動機づけの低下の要因として、中国旅行において、複数の生徒が空気や水の汚れ、食事、ホテルやバスの設備などに適応できなかったことがあげられる¹⁶。こうした感覚は個人差が大きく、ほとんど気にならなかったという生徒や、逆に、日本との差を興味深く感じたという生徒がいる一方で、強い拒絶感などの負の反応を持った生徒が相対的に多くいたことは事実である。不快感や嫌悪感が、学習を継続し、望ましい自己像を追求しようという意欲を低下させ、同一視的調整による動機づけを低減させた可能性は十分にあると考えられる。学習活動・学習内容自体によって活動意欲が引き起こされる内発的動機とは異なり、同一視的調整は、未来の肯定的な自己イメージを実現するために現在の行動を調整するも

のであり、未来志向が強いがために、現在の活動の障害や困難さに対してより脆弱であると言えるのではないだろうか。

障害、緊張、不快感があるにも関わらず、目指す自己像を実現するための活動を継続させるためには、その像が生徒たちにとって明確で魅力的であり、価値あるものと感じさせるためのさまざまな支援や、その実現に向けての意欲を一層強めるような働きかけが必要であろう。また、海外修学旅行を実施する各学校では、事前に旅行先の状況について衛生面や施設・設備面の詳細な状況と具体的な対策の指示をしているが、情報を与えられることと、生徒自身が現実に対応・対処することとは別であり、生徒自身の中に異なる環境に対する耐性を培うための方策もまた必要であると考えられる。

注

- 1 現行の高等学校学習指導要領では、修学旅行は「特別活動」の「学校行事」のうち「旅行・集団宿泊の行事」に位置づけられており、「平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」とされている。これを受け、本稿では、海外修学旅行を「学校行事として、引率者と生徒で構成される団体が、見聞を広め、自然や文化に親しむことを目的の一部として、海外への旅行を行うこと」と考える。期間については、都道府県単位で上限が決められている場合もあるが、調査対象となった静岡県の場合は「規定なし」となっている。
- 2 平成20年度高等学校等における国際交流等の状況。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/01/1289270.htm
- 3 平成20年度学校基本調査。
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1278417.htm
- 4 廣森友人(2006)『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版、12頁。
- 5 Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- 6 Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). "Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective", in E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, New York: University of Rochester Press. p. 16.
- 7 Deci & Ryan (1985). pp. 17-18.
- 8 速水敏彦(1995)「外発と内発の間に位置する達成動機づけ」『心理学評論』第38号、171-193頁。

- 9 速水(1995)、177 頁。
- 10 速水(1995)、180 頁。
- 11 分析対象については 4.1 で詳しく説明する。
- 12 Assistant Language Teacher 外国人指導助手。
- 13 廣森友人(2003)「学習者の動機づけは何によって高まるのか—自己決定理論による高校生英語学習者の動機づけの検討」JALT Journal 第 25 号、173-186 頁。
酒井英樹・小池浩子(2008)「日本語話者大学生の英語学習動機の変化—国際イベントへのボランティア参加の効果」JALT Journal 第 30 号、51-67 頁 など。
- 14 酒井・小池(2008)、61 頁。
- 15 速水(1995)、188 頁。
- 16 「静岡県立藤枝東高等学校平成 20 年度修学旅行紀行文集」および「静岡県立島田高等学校平成 20 年度修学旅行紀行文集」による。